

坊っちゃんは、ダメ教師なのか

『坊っちゃん』のなかで、坊っちゃん先生が授業する場面は少ない。この小説が、学校を舞台にしながらも、「教育小説」ではないからだ。生徒と作る感動の授業とか、先生の愛ある教えとかがテーマではない小説なのだ。だから、主人公である坊っちゃんが、スーパerteacherである必要がある。文字通り「坊っちゃん先生」でいいわけだ。

さて、この坊っちゃん先生、どんな授業を見せてくれるのだろうか。次の場面が、唯一の授業場面だ。

いよいよ学校へ出た。初めて教場へ這入^{はい}って高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思った。生徒は八釜^{やかま}しい。時々図抜けた大きな声

で先生という。先生には応えた。今まで物理学校で毎日先生々と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむずむずする。(『坊っちゃん』三)

漱石自身が先生だっただけに、初めて教壇に立つ教師の心情が、よく描かれている。教育実習を経験していない坊っちゃんだから、なおさら「先生」と呼ばれることへの違和感も強いのだろう。ただ、「足の裏がむずむずする」との感覚は、どうにも分からない。

また、やはり、生徒は新米教師の授業を簡単には聞いてくれない。いつの時代も同じだが、新米教師の力量や出方をうかがっている。それで、「八釜しい」のだ。それでも、坊っちゃん先生、何とか第一時間目を乗り切った。「何だかいい加減にやってしまった」ようだが。そのせいか、二時間目は自分に気合を入れれた。

二時間目に白墨を持って控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。(中略)しかしこんな田舎者に弱身を見せると癖になると思ったから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやった。最初のうちは、生徒も烟けむに捲まかれてほんやりしていたから、それ見ると益ますます得意になって、べらんめい調を用いてたら、一番前の列の真中にいた、一番強そうな奴が、いきなり起立して先

生という。それからと思ひながら、何だと聞いたたら、「あまり早くて分からんけれど、もちつと、ゆるゆる遣つて、おくれんかな、もし」といった。おくれんかな、もしは生温るい言葉だ。早過ぎるなら、ゆっくりいつてやるが、おれは江戸っ子だから君らの言葉は使えない、分らなければ、分るまで待つてるがいいと答えてやつた。

(同)

さすが坊っちゃん。「敵地へ乗り込む」とは、戦闘モードに入ったようだ。それで、授業が始めれば、敵である生徒の住む松山では通じない、江戸弁「べらんめい調」で煙に巻く作戦をとつたのだ。生徒が分かるかどうかなどは、関係ない。なにせ、敵地へ乗り込んでの勝負なのだから、「分るまで待つてるがいい」のだ。さて、その勝敗の行方は？

この調子で二時間目は思ったより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗を流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあど囁した。その中に出来ん出来んという声が聞える。箆棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを出来ないというのに不思議があるもんか。そんなものが出る位なら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ帰つて来た。

(同)

やはり仕返しを受けた。超難問を突きつけての、新米教師の実力測定だ。この勝負は分が悪いとみて、坊っちゃん「急いで引き揚げた」と語る。どうみても、「逃げた」が生徒たちの判定結果だろう。仕返しは、まだつづく。

坊っちゃんが教室に入ると、前日に食べた天麩羅蕎麦四杯のことを黒板に書かれ、囃し立てられた。さらに数日後には、団子を二皿平らげたことも、温泉の中で遊泳したこともからかわれた。

新米教師の通過儀礼のようなこんな洗礼には、先生はユーモアと余裕の感覚で対応するのが一番。ムキになった途端、生徒の更なるからかいの餌食になる。はてさて、坊っちゃん先生の対応行動は……。

おれはだまって、天麩羅を消して、こないたずらが面白いか、卑怯な冗談だ。君らは卑怯という意味を知ってるか、といったら、自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じゃろうかな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、授業を始めてしまった。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんまり腹が立ったから、そんな生意気な奴は教えないと

いってすたすた帰って来てやった。生徒は休みになって喜こんだそうだ。

(同)

「卑怯」「やな奴」とは、生徒さんへの散々な評価。そして、更につづく見事な「減らず口」には、とうとう坊っちゃんがキレた。教室から「すたすた帰って来てやった」そうだ。どうもこの勝負、「敵」である生徒さんの勝ち戦になっているようだ。そして、この場面での、何とも決着がつかない終わり方が、「バツタ事件」という大戦おおいぐまへと発展していったわけだ。

読者は、坊っちゃんの語りのテンポに乗せられて、言葉のやり取りや坊っちゃん先生の行動に、思わず喝采を送りたくなる。だが、ふと考えてみる。この現実がわが子の教室で起こっているとしたら、と。保護者としての貴方は、坊っちゃん先生をどう評価するだろうか。

その一 坊っちゃんを授業評価する

現代日本の授業評価

「生徒が先生の授業を評価する」、そんな経験の持ち主は、二〇〇〇年(平成一二)以降に高校

生になった人たちだ（高知県はもう少し早い）。かつて、「授業の感想を書いてくれ」なんて言う先生もいたかもしれない。しかし少なくとも、「4 3 2 1」のような数値で、学校の全先生の授業を評価することはなかったはずだ。

だが、いまや全国の学校で、この「生徒による授業評価（アンケート）」を実施していないところはない、と言ってよい。形式は、いろいろだ。各教育委員会の例示を学校ごとに改編しているので、統一体ではない。ただ、質問している内容、つまり評価項目にそれほど大きな違いはない。

授業評価の目的は、もちろん先生の「授業力」の向上だ。そして、その結果としての生徒たちの学力向上だ。「いい授業」をつくる、あるいは「いい授業」に改善していくことに異論がある人はいないだろう。また、評価して、あるいは評価されて改善を進めていくこと自体は、どの業界にも共通した流れである。より良いものになっていくのなら、学校や教師だけが特別なはずはない。

問題は、評価されるべき「いい授業」とは何か、ということだ。「いい授業」の基準と言ってもよい。この基準が、例えば時の総理大臣や文部科学大臣の好みで決められては、おかしなことになる。また、先生一人一人の勝手な思い込みで決めるのも、問題だ。では、何を議論の基本にするのか。

文部科学省が発行した『生徒指導提要』のなかに、「児童生徒一人一人に楽しくわかる授業を実感させることは教員に課せられた重要な責務です」という記述がある。ここでのキーワードは、教員の責務だともされる「楽しくわかる授業」だ。だとすれば、これが「いい授業」のひとつの目安にならないだろうか。

もちろん、「楽しくわかる」とは、先生の冗談に盛り上がったとか、難しい内容を単純にした、などという話ではない。理解へ導く方法が「楽しく」、結果、深い理解にたどり着いたことで「わかる授業」になった、そういうレベルの話だ。それでも、「楽しく」も「わかる」も定義づけが必要だ。ただ、その定義探しをしていく過程こそが、「いい授業」づくりなのだとも思う。

当然、その過程に関わるのは先生だけではない。授業はインタラクティブ（相互作用）で成立するものだから、先生と生徒の共同作業やコミュニケーションが、「いい授業」をつくっていく。授業評価が、そのインタラクティブを促進するための手段になるなら、結構、意味あるものになるかもしれない。

坊っちゃんに授業評価に耐えられるか？

ここで、坊っちゃんに、現代の教室に立つてもらおう。そして、『坊っちゃん』に描かれる授業場面を使って、坊っちゃん先生を授業評価してみよう。坊っちゃんに数学を教わった、松山中